

加藤にとっての伝統的日本画の世界

日本から伝統的な現役日本画家加藤弘光という画家が来てサラマンカで初めてその素晴らしい絵を飾る。

日本画というものを知らないヨーロッパ人にはここでする説明は驚きかもしれない。というのは材料や画題などがエキゾチックに特に日本的に見えるからだ。そのうえそれらは明らかに日本文化のものである。それにもかかわらず、彼の構図は新しく、独特のものであることを知っていただきたい。

画家自身が制作について私に語ってくれた。

「日本画の伝統的世界は一定の約束事とともに様式化されているところがあります。ですから周囲の作品と同じようにならないように一層の努力をしなければなりません。」

加藤はこの問いの解決に対して長い間そして必死に努力して考えてきた。最終的にその努力は作品の中に感じられる。なかなか大胆な構図を試して解決を図っていることがわかる。桜の花びらに注目しよう。日本では桜の美しさを楽しむ花見という習慣がある。四月の花が咲き乱れる時期に外に出て、その美しさを楽しむための酒宴を設けるのだ。今では皆カメラも持って行く。皆普通桜の木全体を撮るより花を撮りたがる。もしそこに月でも出ていたら場面は最高だ。加藤の作品はまるでその瞬間のスナップショットを取ったようだ。こういった構図のおかげで伝統的な日本画の世界から一線を画している。

私は浮世絵のことを思い出した。画家歌川広重のような19世紀の日本人アーティストの作品は1858年鎖国政策の終了とともに一気に海外へ流出した。それがパリで大きな浮世絵のブームを引き起こす。ヨーロッパで今まで見たことがない構図に皆惹きつけられたからだ。浮世絵は日本人にとって本当に安いものだった。それが一気に値段が上がり、本物のアートとなったのである。加藤が一番賞賛されている場所というとアメリカ、特にニューヨークだ。だがそのことが日本で加藤の評価を高め、彼の作品に注目がいくようになったのである。

構図の観点からいったらそれは奇想であると言える。だがテーマもそうだというわけではない。いや、奇想どころか日本文化に影響され、そこにどっと使っている。儂いものが持つ美しさへ寄せる共感に似た愛である。秋の紅葉や桜の花といった短い命のものが持つ美しさへ想いを寄せる感情はすべての日本人に共通しているだろう。その感情が作品から感じ取れる。

ぜひ、プロのただ単にアート好きという人だけではなく、アート関係者にも、卓越したテクニックを持った決然とした日本人画家の作品を通して日本文化を垣間見るために展覧会に足を運んでいただきたい。展覧会は2月8日から3月7日まで、サラマンカ大学の **Centro Cultural Hispano Japonés** センターで開かれます。スペインにとって新しい、それでいて本当に日本文化であるものに触れる機会にみなさんをお誘いいたします。オープニングには加藤本人が出席します。

山田 哲
スペインアート評論家協会および国際アート評論家協会員